とある劇場の幻想楽団《オーケストラ》

コロネ108

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある劇場の幻想楽団（オーケストラ）

【Ｎコード】
Ｎ６２４６Ｎ

【作者名】
コロネ１０８

【あらすじ】
青い電脳での聖杯戦争、紛れ込んだのは、とある異世界の学園都市の学生、上条響耶。彼のサーヴァントは赤き皇帝。途中で得る協力者は銀髪のサイバーゴースト。最終的に勝者となった彼らは、少年の学園都市で二度目のアンコールに応えることになる。三人のソリストが組むことで織り成すご都合主義ファンフィクションファンタジー。もちろん主人公はかなり強めの設定。

プロローグ　上（前書き）

この作品は禁書と型月作品とのクロスオーバー作品です。主人公は禁書のオリ主。ＳＳを書くこと自体、初めてなので到らない箇所やおかしな点が多々出てくると思います。また、駄作の危険性もあるため、両作品に深い愛着がある方や、読んでつまらないと感じる方はあまり読まないことをお勧めします。

プロローグ　上

家族を想う人嫌いの鍵盤の奏者
友を思う聖盾を担う弦楽の騎士
人を愛した暴君たる劇場の皇帝
青き世界で勝利したソリスト達
彼ら三人が織り成す旋律と物語
次なる黄金劇場の演目は――――
――――とある科学と魔術の幻想
門(さぁ)を開け！独唱(アンコール)の幕(時間だ)を開けよ！

「ったく、何で月に三回も財布なくすんだよ。当麻、来月お前小遣い無しな」

「ホントすまん、って無し!?勘弁してくれよ、“兄貴”」

「兄貴って呼ぶなつってんだろうが。まぁいい、間に合いそうだし」

遅刻を免れるため、交差点に引っかかるまでダッシュして来た俺たちはお互い息が整わないまま、ゼェゼェ言いながら信号を待つ。

「それよりもお前、放課後のこと分かってるよな」

すぐ忘れる馬鹿な弟に確認をとる。今日から帰る場所が学生寮ではなくなるからだ。今出た学生寮から、マンションへ引っ越すことになっているのだ。

「分かってるよ。でもあの学生寮で十分だったのにな」

「しょうがない。あの二人が自分たちだけ新居に引っ越すのは悪いって言ってんだから。まぁ、一人の部屋になるのは素直に嬉しいけどな。セキュリティーもバッチリで部屋もこれからは一人で使える」

突き放したように当麻には言ったが、内心両親のタイミングのよさに感謝感激だった……このままアイツらをホテルに匿い続けるにも金銭的にも精神的にも限界がある。

当麻と二人で学生寮に住んでるところにいきなりアイツらを連れて行くわけにも行かない。

今までは学生寮の相部屋だったが、これからはマンションの部屋を一人一部屋借りることになる。

「でも、昔はあのぼろいアパート、狭くて嫌いだったけどいざ引っ越すとなると懐かしくなるな。しかも俺たちはもう見れないしな。でも相変わらず凄いな、響耶（きょうや）。だって……と、噂をすれば」

「昨日行われた学園都市チェス統一王者（チャンピオン）と　樹形図（ツリーダイアグラム）の設計者との１３度目の対決は王者（チャンピオン）の勝利でした。これで３勝５敗５分としました。続いて次のニュース……」

街頭ニュースがいいタイミングで流れてくるのを聞く。

「優勝だけでも凄いのに、コンピューター相手でも勝てるんだからな。今回の俺らの引越しもお前の賞金やらのおかげだしな。先週はロンドンでピアノ、帰ってきたと思ったら缶詰でチェスだもんな」

「あの二人には、返せないぐらいの恩があるからな。使い道も無かったし、賞金なんてどうでもいい。でも、お前は働いて返せよ」

「俺に恩はないんかい」

最近またツッコミの速度が上がってきた当麻。

もっと別のところを努力すればいいのに…。

「冗談だ。恩は無いけど、金返す必要も無い」

「結局恩はないのかよ」

加えておくと、ピアニストとしてやチェスの賞金やらだけではない。
養子になったその日から父の仕事に口を出し続けていた。
天才ともてはやされていたとしても5歳の子供に口出しをされたら、普通の親ならプライドを傷つけられたと思い激怒するだろう。
ところがどっこい、この父親になった男も存外に器の大きい奴だったわけだ。
俺の指摘が理に適っていることを懇々と説明すると、次の瞬間、仕事先に電話をして俺に従って指示を一変するように命じていた。
次からは決める前に、俺に聞くようになったりと、柔軟な対応を見せ、ドンドンと昇進していった。
実際は、机上で考えていた俺には気づけないことを逆に父親から教わっていたこともあった。
学園都市に当麻と入学してのはいいが、9歳までいろいろあって身動きが取れなかった。
しかし、その後はこの経験を生かしてデイトレードなどを行い、学生では有り得ない金額の貯金もある。
余談だが、父の会社の筆頭株主でもある俺には、父を解雇することもできる。
後日、父に話したら、笑いながら『解雇しないでくれよ』と言って

いた。

冗談はさておき、俺には上条家族には生涯返すことのできない恩がある。

今でこそ結構大きな外資系企業の営業担当で、わずか１１人しかいない精鋭の『証券取引対策室』に所属しているが、当時は俺のことを養子にする余裕などなかったはずだ。

金銭で返せるものは少ないことも理解しているが、それでもできることからしようと思っていたから、繰り返すがアイツらの現れたタイミングが良かった。

「それにしても信号変わらな過ぎないか、これ」

乱れていた息もすっかり整うぐらい待っているが、いっこうに信号の色が変わらないことに当麻が文句を言っている。

確かに何かおかしいと思っていると自分の携帯が震える。

「はい……今からですか？学校は？はいはい分かりました」

ほんとに細かいことにも気が回る奴だな。

電話の相手に毒づきながらも踵を返す。

「どうしたんだ。どこ行くんだよ」

「お仕事だよ。学校は更欠。それとこの信号当分直らないから迂回して学校行け」

「支部長も大変だな」

当麻の言葉を背中に聞きながら、風紀委員177支部に向かう。

（やれやれ、朝っぱらから、交通基盤ぶっ壊すってどんな奴だよ）

これからやらなくてはいけない仕事を考えると急ぐ気がなくなるが、事故った車を見ると、結構深刻に急いだほうが良さそうなことが分かる。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――

（はぁ～、なんで朝から交通プログラム打ち直さなきゃいけないんだ。不幸体質うつったかな。……これでおっしまいと）

共用のデスクのパソコンを使っているため使い難くてしょうがない。仮にも支部長である俺には専用のデスクが存在するのだが、現在使用不能になっていた。

（これはないだろ、白井）

部下の私物、愛と漢方の絶倫媚薬という文字が入ったラベルのダンボールやら空の牛乳パック等が散乱しているマイデスクを見て溜め息が出る。

パソコンを落として、時間を確認すると１１時になるところだった。

１７７支部を出て柵川中学校の廊下を歩きながらぼやく。

「三時間近くもやってたのか。最悪だなっていうか授業中だろ、まだ。なんでこんなに人多いんだよ」

明らかに周りの生徒から違う制服をきた俺は異常に目立つっていうか、誰だコイツという目線を向けられる。

「どうだった」

「ぜんぜん、前と変化なし」

周囲の会話を少し聞いただけで疑問はすぐに消える。

（なるほど、今日は身体検査（システムスキャン）か。それで午前授業か）

腹も減ったし、アイツらと合流して昼食を済まそうと思って、足早に校舎から立ち去ろうとする。

しかし校庭でそれも潰える。

「そこの人、止まりなさい。風紀委員（ジャッジメント）です」

知った声を背中に浴びせられ立ち止まらざる負えなくなる。

見知らぬ奴が違う学校のワイシャツ、その下から思いっきり校則違反のシャツを着て校内を歩いてれば、普通の奴でも風紀委員（ジャッジメント）を呼ぶだろう。

下に至っては黒のレザーパンツだ。

そしてこの声の主もこの学校に入学していたんだったな、と思い出す。

「ちょっと支部まで来て……って支部長じゃないですか、髪伸ばしたんですね」

「初春、髪ぐらいで分からなくなるなよ」

「だって支部長、私が中学に入ってから全然見てないですし。支部長の癖に支部に顔見せないからですよ。それにそう言うなら腕章付けてください」

こっちの話を聞かないでベラベラ喋る初春の言葉をさえぎろうとして

「だから……」

「う〜〜いはる〜〜ん♪おっはよ〜〜〜ん！！」

バサッという音と翻るスカート、普段は受けない太陽を受けて輝くパンツ、その原因と思わしき少女が視界に入る。

おそらく次の台詞は同時だっただろう

「ぎゃわぁーーーーーーーーーっ！！！！！」

「今日は淡いピンクの水玉かー」

初春はすぐに翻ったスカートを押さえつけるが、それでも周りの人間が中を見るには十分な時間だっただろう。

「見ましたか」

凄い勢いで俺に聞いてくる初春に対して、見てないと言ってやるほど優しい性格はしていない。

「ああ、淡いピンクの「わーわー、繰り返さないでください」」

周囲に響き渡るようにパンツの柄を説明しようとするのを必死に防いでくる初春に思わず笑ってしまう。

後ろから急にスカートをめくり上げた黒髪の少女が楽しそうに笑っているのを見て、対照的にもう一度視線を戻すと初春は真っ赤な顔をして恥ずかしがっている。

とりあえず周りの目がきつくなってきたので話せるところまで移動しようと二人を促す。

学校近くの広場のベンチに座った途端、黙っていた初春が犯人の少女に非難の声を上げる

「男子の目の前でさっきの暴挙ッ！？何するんですか、茶天さん」

「クラスメートなのに敬語とは他人行儀だねぇ。いや、初春がカッコイイ彼氏を学校に連れて来たっていうから見に来たんじゃない。ついでに彼氏に初春の下着見せたげようと思って」

「彼氏ってどういうことですか」

「みんなが言ってたんだよ、初春がかっこいい人と校内で楽しそう

に喋ってたって。そしたら誰かが前にも一緒にいるの見たって話して……そしたらもうこれは彼氏しかないじゃん」

「違いますよ。それもそうですが、支部長も笑ってないでなんか言って下さい」

ハイハイと言って自販機に歩いて行き、適当な飲み物を二つ見繕って二人に渡してやる。

初対面の黒髪の子がどんな子か分からないが、遠慮して受け取らなければ自分で飲むから無駄にはならない。

まぁ、もっともあんなことをするような少女で慎み深いってこともないだろうけど。

元々はそういう性格なのか、その娘はありがとうございますと言って素直に飲み物を受け取る。

「いやー。カッコよくて機が利いて優しい彼氏か、気に入らない奴だったら文句言ってやろうと思ってたんだけどなぁー。でもよかったね初春、下着も彼のタイプだったみたいだし」

爆発しそうなぐらい赤くなって何を話していいのか分からなくなっている初春にそろそろ助け舟を出してやる

「それぐらいにしてやってくれ。ええっと茶天さんでいいんだよな。コイツ、いや初春はただの後輩兼部下。だから俺は彼氏でもなんでもない」

へ？っという顔をしているので自己紹介をする

「風紀委員（ジャッジメント）１７７支部支部長の上条響耶だ」

よろしくと挨拶を言った瞬間、茶天は何かに気づいたのか興奮したように、握手のために出した俺の手を両手で握ってくる

「上条……って、あのピアニストの。それに今朝のチェスのニュース見ました」

「ああ……ありがとう。とりあえず落ち着け。そしてそこで放り出されていじけている初春を慰めてやるといい」

茶天は今までの勘違いに気づいたらしく、しまったという顔をして謝罪する

「ごめんごめん。調子乗り過ぎちゃった」

初春に、お詫びにあたしのパンツみせようかと笑いながら謝っている。

「上条さんもすいません」

「いや、気にしないでくれ。それに茶天さんのことはよく初春に聞いてるから大丈夫だ」

「初春に何聞いてるかは分からないですけど、初春の親友の茶天涙子です」

よろしくと言って挨拶をしているとスッカリ忘れられていた初春がいじけてしまっているのを見て、流石に茶天さんのフォローが入る。

「あーそうだ。どうだった、初春」

「何がですか」

「決まってるじゃん、身体検査（システムスキャン）」

「ああー、全然だめでした。相変わらずの低能力者《レベル１》、小学校の頃からずっと横這いです。担当の先生からも『おまえの頭の花は見せかけか。その花の満開パワーで能力値でも咲き誇れ』って」

「その担当の教師にもいろいろツッコミたいところだけど……けど、まぁとりあえず元気だしなよ、低能力者《レベル１》なら。あたしなんか無能力者《レベル０》だよ」

そう言いながら顔の前に指で０を作りながら軽く言った茶天だった。

しかし思ったより重く受け止めてしまった初春が黙ってしまう。

自分の言葉が雰囲気を変えてしまった茶天はそのまま言葉を続ける。

「でも、そんなの関係ない。あたしは毎日が楽しければそれでＯＫ」

「茶天さん……」

「初春、いい友達持ったな」

本心だった。

いい友は人生の彩りを豊かにする。

ここで初春は余計なこと言わなければいいのに……

「はい、支部長とは大違いです」

「あ〝あ〟？」

「やだなぁ、支部長。冗談ですよ、冗談」

一連のやり取りを見ていた茶天が笑いながら話しかけてくる。

「上条さんも初春がいつも迷惑かけてます。でも結構、面白い人なんですね」

「いや、おれは面白くもないし、まぁたしかに優しい人間でもないことは事実だ」

「そうですよ。茶天さん、騙されないでください」

コイツほんと懲りないな。

「俺のデスクの掃除は初春決定な」

「だから、冗談ですって。それでどうして二ヶ月近く顔見せられなかったんですか」

繰り返しになりかけた話の路線を露骨に変更する。

「ああ、イギリスのファンキーな女王様の誕生日に演奏しに行って

たんだ」

「イギリスに女王様……さすが有名人ですね」

「カンベンしてくれ」

これだからこの仕事は受けたくなかったんだ。

有名でもピアニストなんか世間では何か話題にならない限り広まることは無い。

初春が気を取り直して質問してくる。

「でも、なんで二ヶ月もいなかったんですか。それなら一週間ぐらいじゃないんですか」

「オケとの打ち合わせやら練習、リハに付き合えば二ヶ月は必要だよ」

まぁ、でも予想外の事態に巻き込まれたことはたしかだ。

二ヶ月しか経っていないが、俺は四ヶ月近くを生きたことはたしかだ。

美しく残酷な蒼き電脳、脳幹を揺す振られるかのような戦闘、そしてそれを体現していた……

自分の世界に入り込んでしまっていることに気づいて、話題を変える。

「それはそうと、報告書があったけどおまえ今朝暴行犯捕まえただろ。その周辺のいくつかの監視カメラがいくつかおかしくなっていてその時間の記録が見れないんだが、何か知らないか」

「全然、気づきませんでした」

初春は顔色を変えずに答える。

こいつも染まったものだな、黒子色に。

しょうがないので、次の手段だ。

「初春、今なら真実を話せばお前のことは不問にするが……この先はどうなるか分からないぞ。さぁ、仲間と心中するか、自分は助かるか、どっちを選ぶ」

「白井さんに言われました」

即決で仲間を売った初春だった。

「それで白井に何を言われたんだ」

「監視カメラの記録を消せば、御坂さんに合わせてくれると」

「御坂って常盤台のエースの超電磁砲（レールガン）のか」

そう話していると露骨にいやな顔をした茶天が割り込んでくる。

「常盤台の超能力者《レベル５》……どうせまた能力をかさに着た上から目線のいけ好かない奴じゃないの」

「そんなこと……」

「だってああいう人たちって自分より下の人間を小馬鹿にするじゃん。むかつくんだよね。しかも常盤台のお嬢様だなんて」

「いいじゃないですか、お嬢様。いえむしろお嬢様だからいいんじゃないですか」

「って単にセレブな人種に憧れてるだけなんじゃ……」

「そんなことないですよ。ちなみに私の出身が西葛西だってのも関係ないですよ」

妙に偏った思想を持っている二人によってどんどん話が脱線していく。

「それでいつ会うんだ」

「今日この後です」

「丁度いい。俺もついてく。どうせ白井も来るんだろ」

「分かりましたよ。そうだ、この際だから茶天さんも一緒に」

「ちょっと待ってよ。どうして、何も関係の無いあたしが」

手を持って強引に茶天を連れて行こうとしているが、さすがに知らない人たちに会いに行くけど一緒に来いといわれて戸惑っている。当たり前だ。

そんな茶天に声をかけてやる。

「会ってみればいいと思うぜ。確かに知らない奴の中に入っていくのは勇気がいるが、妙な偏見は世界を狭くする」

「偏見って、どういう意味ですか」

「会ってみればわかる」

そう言って茶天を促し、ようやく三人は歩き出した。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――

待ち合わせはジョセフズというファミレスの前だった。

ガラス越しに店内を見ながら三人で歩いていると目的の二人が座っているのを見つけた。

……目を疑う状況だった。

「あれ白井だよな」

「ええ……」

他の二人も白井を見て絶句している。

何故かって、そりゃファミレスのソファで人（同姓）に抱きついているのを見たらそうなる。

ファミレスを出てきた二人と合流して、白井が知らない奴同士が並ぶ場を仕切りなおす

「というわけでとりあえず紹介します。こちら柵川中学一年、初春飾利さんですの」

「初めまして初春飾利です」

初春は顔を赤らめながらアイドルにでも会った感じで自己紹介をする

「そこの殿方は……」

「風紀委員（ジャッジメント）１７７支部支部長の上条響耶だ。チラッとだけ白井に話があるから来ただけだ」

続いて白井が茶天に自己紹介をするよう促す

「どうもー、初春のクラスメートの茶天涙子です。なんだか知らないけど付いてきちゃいました。ちなみに能力値は無能力者《レベル０》でーす」

「ちょっと、茶天さん何を」

御坂はそんな茶天の自己紹介を気にした風も無く

「初春さんに茶天さん、あと上条先輩ね。あたしは御坂美琴、よろしくね」

「よろしく……」

「……お願いします」

予想以上にさわやかな挨拶に少し驚いたようだ。

「では、つつがなく紹介も済んだところで、支部長が何でここにいらっしゃるのかしら」

「何で、よくそんなことが言えるなぁ。今朝の交通麻痺って言えば、分かるか」

白井は喋ったな、という視線を初春に向けるが、御坂もこれを聞いた瞬間ギクッとなる。

「交通麻痺の原因は攻撃性の電撃だそうだ」

「黒子、アンタ、私を庇って……」

なんか思ったより深刻な感じになってしまった。

軽く注意するつもりだっただけなのに……

「お姉さま、気にしないでください。黒子はお姉さまのためだったら」

そう言って俺のほうに両手を突き出してくる。

しかも何故か深刻だった空気が、今は百合百合しい。

「分かった。分かったからもういい。大体隠すんならもっとうまくやれ。それに御坂もあまり派手なことやるなよ」

「な、何よ、あんたたちが早く来ないから悪いんでしょ」

「ああ、そうだな。怪我した人達にもそう説明するか。暴漢を倒すために一区画分の交通を麻痺させましたって。そうだ、そうしよう」

「う……悪かったわよ」

俺の皮肉が聞いたらしい。

白井、御坂の二人がしっかり反省してそうなのを確認する。

重い空気にだんだん茶天が耐え切れなくなっているのでそろそろ開放してやることにする。

「さて、この話は終了。ってことで俺は行くな。」

じゃあなと言って４人と別れ、待ち合わせの場所に向かう。

待たせると何をするか分かったもんじゃないからな……

しかし、このときは直ぐにまた会うとは思ってもみなかった。

プロローグ　下

ゲームセンターに向かって４人の女子中学生が歩いている。

前に２人、少し距離を開けて後ろに２人という変わった形で歩いている。

これは私と初春が御坂さんのなかなか想像と実際のギャップに対応できていないからだ。

「なんかさぁ、全然お嬢様じゃなくない」

「上から目線でもないですね」

誰について話しているかと言えば、先ほどから妙にさわやかな感じを振りまいている学園都市に八人しかいない超能力者（レベル５）の一人についてだ。

「でも、あんな超能力者《レベル５》の人に説教できる上条さんもすごいよね」

さっき会ったばかりの人のことを思い出していた。

あの人もおそらく高位の能力者なのだろうが、自分のことを見下していた感じはなかった。

「ねぇ、初春、上条さんもやっぱりすごい能力者なんだよね」

自分でも当たり前なことを聞いていると思ったが、返ってきた言葉

は意外なものだった。

「違いますよ。支部長は無能力者（レベル0）ですよ」

「えっ……でも、風紀委員（ジャッジメント）の支部長なんでしょ」

上条さんの話をしていたからか前の二人も会話に入ってくる。

「さっきの奴のこと話してるの。確かに私が悪かったけど……でも道で説教するのはどうかと思うわよね、黒子」

「朝、申し上げたじゃないですか。お上に睨まれますわよって。それにわたくしの場合、あれは怒られたうちに入りませんわ。あれはもっとうまく隠せっておっしゃいたかったのでしょうし」

「ですよね。支部長は白井さんよりも滅茶苦茶やるのに始末書書いてるの見たこと無いですし」

初春が白井さん言葉に同意する。

「それで何話てたの」

「いやー、上条さんが無能力者《レベル０》なのは意外だなぁって」

「えっ、アイツ、無能力者《レベル０》なの」

御坂さんはいい人だとは分かってきたのだが話しにくいのはまだ変わらない。

それはおいておくとしても、風紀委員（ジャッジメント）は基本的に能力者との戦闘に

なることもある。

だから基本的に能力者で構成されることは周知の事実だ。

「私だって低能力者《レベル1》ですし、戦闘できるような能力じゃありませんよ」

「そうですわ。ですが、あの方を初春と同じ感覚で捉えるのはやめたほうがよろしいかと。初春は適正試験では情報処理の一点突破でするような半人前ですが、あの方は適正試験を過去最高の成績でパスしてるのですわよ」

「白井さん、酷いです……」

初春が泣いているのもお構いなしに白井さんの話の先を促す。

「最高って、でも無能力者《レベル0》なんですよね」

「ええ。確かに能力値の評価は低かったようですが……演算能力、戦闘技術、身体能力、その他ほとんどがマックスオーバー、特に戦略・戦術面ではほとんど未来予知のレベルだそうです。ただ性格に難ありという文句がいつも書かれていますわ」

レベル0と聞いて感じていた親近感が潮を引いていくのが分かる。

「へぇ、そうなんですか」

「興味のある事件しか調べないんですよねー」

「どうかしたんですの、茶天さん」

自分でもかなり気のない返事だなと思ったが、何とか取り繕う

「なんでもありません。そういえば、初春なに見てるの」

初春が道で配られたチラシを覗き込んでいる。

「新しいクレープ屋さんみたいですね。先着１００名様にゲコ太マスコットプレゼントって……」

「なに、この安いキャラ。今時こんなのに食いつく人なんて……痛っ。すみません」

前を歩いていた御坂さんが急に立ち止まっていたのにぶつかってしまう。

御坂さんも同じチラシに目を通している、というか目を奪われている。

「御坂さん」

「どうなさいましたの、お姉さま。あらぁ、クレープ屋さんにご興味が、それとももれなくもらえるプレゼントの方ですの」

「「えっ」」

まさかあんなマスコットを欲しがる人がいるとは思えないが……

「何言ってるのよ。私は別にゲコ太なんか。だってカエルよ。両生類よ。どこの世界にこんなものもらって喜ぶ女の子がいる……」

「「あっ」」

白井さんが笑いを堪えている。

無理も無いと思う。

だって御坂さんのカバンにはしっかりゲコ太がついているのに気づいてしまったのだから

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一

なんでこんなにクレープを俺は食っているんだろうか。

そう思いながらも先程からずっと食べ続けている俺を周りの小さい子が指を指して

「どうしてあのお兄ちゃん、あんなにたべてるの」

と親に聞いている。

そりゃそうだ、二つしかない屋外テーブルにクレープの山を築いているのだから。

原因を作った阿呆な皇帝は飲み物を探しに行ったきり帰ってこないし、もう一人の待ち人は来る気配すらしない。

今日は、あいつらの家具やら生活用品、衣服なども買わなくていけないから、早く来て欲しいのだが……

そんな中、空いているベンチを探しているさっき別れたばかりの目立つ二人を見て声をかける。

「なんでここにいるんだ。４人でどっか遊びに行くじゃなかったのか」

初春と白井から経緯を聞き、テーブルの上の大量のクレープを食べる手を休める。

「それよりも支部長こそこんな所で何やってるんですか。あ、ひとつもらってもいいですか」

ああ手伝ってくれと言って、クレープの山に引き気味な初春と白井にクレープを渡す。

クレープの食いすぎで気持ち悪いが、質問に何とか答える。

「人とここで待ち合わせだったんだ」

「支部長が友達いたんですか！？」

「……できたんだよ」

この発言が、俺が少し前までどんな奴だったのかを表わしている。

今でも皮肉屋で気分屋だが、ここ二ヶ月で多少はマシになった。

「それでなんでこんな事態になってるんですの」

「ソイツがここに来たまでは普通だったんだ。ただその連れは意外に目聡くてなクレープを食いたいと言ってきたんだ。もう一人待たなきゃいけないから別にいいかと思ってたんだ」

それでどうしたんですかと言って初春が二個目に突入する。

「おれは普通に昼飯食うつもりだったから、並ばずにここで待ってたんだ。ただ妙に遅いなと思ってたら、どうもトッピングの組み合わせで悩んでるらしい。面倒になって考えなしに全部頼めばいいじゃんと言ったら、こうなってしまったわけだ」

「その人、こんなに食べるんですか」

「いや、食べるつもりで買ったなら俺が無理する必要ないだろ。二つ目で飽きたってさ」

「それでどうするんですの、このクレープの山は」

「もう少しすれば、強力な援軍が来るはずだ」

幸せな顔をしながら食べる男装の麗人を思い浮かべる。

「え～、私が全部食べますよ」

口の周りにカスタードやらクリームをべったりつけて話す初春にポケットティッシュを投げて渡す。

食べる速度がどんどん加速していく初春はもう６つぐらい食べている。

クレープを一口で食べるなんて漫画でしか見たことが無いぞ……

「で、その無謀な頼み方をした方はどちらですの」

「ああ、飲み物買いに行った。お前らの方も後二人はどうした」

「今、並んで私たちの分まで買いに行ってますわ。にしても人が多いですわね」

自分の分あるのに初春はこんなに食ってるのか……。

「学園都市に入学予定者向きの説明会らしい」

そんな風に話していると、茶天と御坂の二人が戻ってくる。

御坂が完璧にこちらを睨んでいる。

先程の説教ですっかり嫌われたのだろう。

「はぁー、ガキの相手は疲れる」

誰にも気付かれないぐらいの声で呟く。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー

だれかこの空気から私を助けてください

今、私と御坂さんはクレープを買う列に並んでいる。

予想外の混雑に、とてつもなく苛立っている御坂さんのオーラが痛い。

決して人ごみが嫌がっているのではないことが分かる………。

理由は間違いなく先着１００名のあれだ、周囲の子供が貰ってはしゃいでいるもの……ゲコ太。

「あの……御坂さん……順番変わりましょうか」

「えっ、別に順番なんて……私はクレープさえ買えたらそれでい

『やった、ゲコ太ゲットー』

動揺が誰にでも分かるぐらい声に出ているし、通り過ぎていく子供の持つゲコ太に完全に視線が行っている。

しばらくして自分の番が回ってくるが……

「お待たせしました。はい、どうぞ。最後の一個ですよ」

「どうも……えっ、最後」

ドキッとして振り返ると、案の定、すぐ後ろで御坂さんが地面に手をついて落ち込んでいる。

泣くほど欲しかったんですね……ゲコ太。

「あの……」

半泣きの目でこちらを御坂さんが見てくる。

「よかったら……これ」

そう言って、マスコットを差し出すと、すぐに飛びついてくる。

「いいの！？ホントにいいの！？アリガトー」

「いえ……」

そんなやり取りをしながら、初春たちのいるベンチを探していると、近くに二つしかない屋外テーブルの一つを三人で陣取っているのを見つける。

さっき別れたはずの上条さんがいることに気付いて、せっかくゲコ太を手に入れて満足な御坂さんの機嫌が急に悪くなるのを感じる。

「アンタ、ここで何やってんのよ」

上級生をアンタ呼ばわりする御坂さんだったが、上条さんは

「偶々だよ」

と気にした様子も無く、軽く流す。

「アンタ……ねぇ……」

文句を続けようとする御坂さんだったが、クレープを受け取った白井さんが突然飛びついてくるのをかわす。

すぐに起き上がって自分のクレープを御坂さんに食べさせようとする白井さん、それを牽制する御坂さんを尻目に、テーブルに座って自分のクレープを食べ始める。

「良かったですね」

「えっ……」

突然、初春が聞いてくるが何のことやら……

「御坂さん、お嬢様のイメージとはちょっと違ったけど、思ってたよりずっと親しみやすい人で」

「だから言っただろう、会ってみれば分かるって」

たしかに予想とは全然違っていたが……

「どうなんだろうねぇ……」

分からないと言うのが今の本心だった。

私の視線のに気付いた御坂さんが近づいてくる。

目の前で私にクレープを差し出してくる意図が掴めず、

「……はい？」

思わず間の抜けた返事をしてしまう。

「味見でしょ。さっきのお礼。一口どうぞ」

「えっ……」

「お姉さま！！……お、お姉さまはわ、わ、私というものがありながら、茶天さんとの間接的なベーゼを交わす御積りですの」

見ている私や初春、上条さんまでドン引きだった。

「アンタの友達には付いていけないかも」

この言葉に初春は苦笑するだけだったが、何かに気付いたのか

「支部長、あそこの銀行なんですけど、何で昼間から防犯シャッターを下ろしてるんでしょうか」

「……俺は見なかったことにする」

今、すごい発言がとんだような気がする。

だって見てみぬ振りって……

他の二人も気になったのかシャッターの方を見た瞬間、凄い轟音に耳と目を閉じてしまった。

突然のことに混乱する中、すぐに白井さんの真剣な声が聞こえる。

「初春、警備員（アンチスキル）への連絡と怪我人の有無の確認。急いでくださいな」

二人が腕章を嵌めるの見て、さっきの轟音が事件であることを悟る。

「黒子！！」

「いけませんわ、お姉さま。学園都市の治安維持は私たち、風紀委員（ジャッジメント）のお仕事。今度こそお行儀良くしていてくださいな」

初春が警備員（アンチスキル）への連絡をしていて、白井が銀行の方に走っていくのだが……

横に座っている上条さんは座ったままクレープを食べている。

「ちょっとなんで普通に食ってるのよ、アンタは！！」

御坂さんが動こうとしない上条さんに掴みかからんばかりの勢いで迫るが、さして変わらない。

それを見ていてやっと混乱の中で失っていた理性が戻ってくる。

「そうですよ。上条さん、銀行強盗ですよ！早く捕まえなくていいんですか」

私も促すが、返ってきたのは冷静な意見だった。

「……俺は見なかったことにするって言ったろ。面倒くさい」

「何を馬鹿なことを「それに」

私の言葉は続く彼の言葉に遮られる。

「それに銀行強盗ぐらい二人で何とかできなければ罰ゲームだ……俺の部下なのだから」

自分の部下であることを強調する上条さんの言葉は傲慢とも捉えられるが、私にはそれよりも彼らへの信頼が伝わってくる。

あまり意図が分からなかったのか、御坂さんが聞き返す。

「どういう意味よ、それは」

「確かに俺が出れば、多少なりとも早く捕まるかもしれない。しかし、この先のことを考えれば、この程度の実践はいい練習になるということだ」

それを聞くと御坂もさすがに黙らざる終えなかったのか、立ったままことの成り行きを見守ることにする。

その信頼に応えるかのように、突っ込んでくる銀行強盗の一人を軽くいなして

「そういう三下のセリフは、死亡フラグですわよ」

投げ倒し、道路に打ち付ける。

「さすが、黒子」

凄い……とそばで見ている中、初春の声が私と御坂さんの注意を引く

「だめですよ！今広場から出たら……」

ツアーガイドの人を初春が必死に止めている。

「どうしたの」

「男の子が一人足りないんです。少し前にバスに忘れ物したって言ったきり……」

「えっ……じゃあ、私と初春さんで」

「私も行きます」

気付いたら、言っていた。

このまま皆何かをしているのに自分だけ何もしていないのは耐えられないから。

「……分かった。手分けして探しましょ」

「そっちは？」

初春がクレープ屋の広場を、御坂さんがバスの中を探している。

私は街路樹周りの茂みを探していると、男の声が聞こえる。

見ると銀行強盗の一人が、男の子を連れていこうとしていた。

御坂さん達に知らせようとした言葉を……飲み込む。

「私だって……」

そうだ、何もしないのが嫌で手伝っているんだ。

ここで逃げてどうする。

小さな覚悟を決めて、男の子の元へ走り出す。
男の子を掴んで無理矢理引っ張って行こうとする犯人に抵抗して、男の子を抱えるようにして守る。
「だめぇーー！！」
手を離さない私に業を煮やして、私を蹴ろうと足を上げてくる犯人だった……
……が、次の瞬間、蹴飛ばされて地面を跳ねていたのは私ではなく犯人の方だった。
「まったく、お前は勇気の意味を履き違えている」
私の前に立っていたのは、上条響耶、その人だった。
……しばらくボーっと、彼の方を見ていたが、我に返って蹴られた犯人が車に乗り込んでいくのを見る。
「上条さん、犯人が……」
しかし、私の言葉をまるっきり無視した上条さんは、私と男の子を立たせて路肩に寄せる。
犯人はすでに車に乗り込んでいつでも発進できる様子だったが、進行方向の道路の真ん中には一人のコインを片手にした少女がたたず

んでいる。

「耳塞いどけ。それから良く見ておくといい……超能力者《レベル５》というものを」

私に向かってそれだけ言うと、また上条さんはまた道路の方に視線を移す。

御坂さんを轢こうと、どんどんと加速した車だったが……

彼女からの一筋の光と同時に爆発を伴ってはじけ飛ぶ。

その様子から車に質量があったのかどうか疑えるような威力だった

……カッコイイと言う言葉しか思いつかない。

「これが……超能力者《レベル５》」

しかし、横の上条さんの口から漏れたのは

「やっちまった」

と言う言葉だった。

—— —— ——
—— —— ——
—— —— ——
—— —— ——
—— —— ——
—— —— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——
—— ——

御坂の放った超電磁砲（レールガン）によって紙切れのように舞う車だが、飛んだものが落ちるのもまた必然。

落下地点を予想し、そこに二人の人がいるのを確認する。

能力を全開で使って間に合うか計算する。ここまでコンマ2秒。

だが、周りに人がいる……

しかし、そこにいる二人が誰であるかわかった瞬間、気が抜ける。

「やっちまった」

もう落下地点の二人への心配は無い。

それよりも車の中には、犯人が乗っているのだ。

生きて逮捕できればいいな……

例の二人のうち一人は黒を基調とした服を着た楽器ケースを背負う男装の麗人。

もう一人は赤を基調とした間に合わせの服を完全に着こなしている金髪のガラス細工のような美少女。

どちらが動くかと思っていると、動いたのは黒い方だった。

落下直前となり、皆が人に車がぶつかると気付きだすが、もう彼らには間に合わない。

「大した天気だ……車が降ってくるとは」

この話は、この場にいない誰に言っても信じないであろう。

次の瞬間、麗人の構えるモーションすら見えない回し蹴りが車体を横殴りに襲う。

普通に考えれば、折れるのは人間の脚だが、このときは違った。

バコンという鉄の折れる音とともに車が吹き飛んでいく。

先程の放物線のような飛び方ではなく、今度は強いライナーのような飛び方で街灯にぶつかる。

しかし絶妙な力加減だったのか、車が爆散するという最悪の結末にはならなかった。

皆が唖然とする中、麗人はまず御坂の方に歩いて行き、

「強い力にはそれに応じた責任が伴う。覚えておくといい」

と軽い感じで諭し、そのまま俺に向かって歩いてくる。

「すまない、遅くなった。すぐそこで彼女と合流したんでな」

と言って、遅れて寄ってくる金髪の美少女に視線をやる。

「奏者よ、ここの自販機とやらはどうして変な物ばかりなのだ」

飛んできた車のことなど些細なことだとでも言うかのように待ち人達は話しかけてくる。

「リーズ、それにセイバー、頼むからあまり目立たないでくれ」

「余に目立ってはいけないなど無理な注文だ。余の存在はそれだけで民衆の注目を集めてしまうのだからな。それに先程のことは余ではなく、リーズの行為だ」

リーズが弁解しようとするが、警備員（アンチスキル）が到着したことで話は途切れる。

二人をテーブルで待たせ、良く知っている警備員（アンチスキル）の近くに行き、事の次第を話す。

ここが学園都市であることもあって、不自然な現象を能力と言う一言で片付けられるのは助かる。

何の能力も使わずに車を蹴り飛ばしたなんて話は誰も信じない。

本人曰く、パンチで平均的に二トンを叩き出すらしい。

「ロンドンでの演奏、ご苦労じゃん。でも、人嫌いのお前には珍しく弟以外と一緒じゃんよ」

「まあな……」

基本的に一人か当麻と一緒だったので、否定できるようなことではない。

今まで自分でも弟離れできていないことは自覚していた。

「しかもあんな綺麗な子連れて……今まで、女っ気無かったのに、急に弟みたいになってきたじゃん」

「ちょっと、むこうでパラダイムシフトがあってな……」

「結構心配だったんだよね……おっと、大事な話があるじゃん。今の犯人だけど、これみて欲しいじゃん」

渡された紙面に載っていたのは、犯人の一人の発火能力者（パイロキネシスト）の能力開発のデータだ。

明らかに能力値と実際の能力に開きがある

「確かにおかしいな。俺に話すってことは、コイツだけじゃないんだな」

「ここ最近、多発してるじゃんよ。学生の間じゃ幻想御手（レベルアッパー）なんてものが噂されている。うちとしては売買の可能性も疑ってるじゃん」

「おもしろい。俺も少し調べてみよう」

そこまで話すと、後ろに黄泉川が視線を飛ばす。

後ろには話が終わるのを待っていた茶天がいた。

「さっきはありがとございます」

「気にしないでいい。仕事だからな」

そう言って二人の待つところに戻る。

幻想御手（レベルアッパー）か。

なかなか面白い話が聞けたし、今日はこれで善しとしよう。

プロローグ　下（後書き）

二人の出演者は彼らだったわけですが、特にリーズの作品が少なくて、妄想を書き始めてしまった結果です。出来の方はどうだったでしょうか。あまり頻繁に更新はできませんが、よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6246n/

とある劇場の幻想楽団《オーケストラ》

2010年10月10日20時24分発行